

道徳教育において物語の背景設定を漸次的に
開示することのメリットについて

——「誠実さ」を教えるための教材とされる「手品師」の話を例に——
(前編)

堤 大 輔¹⁾

On the Merits of Incrementally Disclosing the Background Setting
of an Exemplary Story in Moral education :
Reconsidering the Story of “An Uncelebrated Magician”
Intended for Inculcating “Sincerity”
(The First Part)

Daisuke Tsutsumi

Abstract

The story of “an uncelebrated magician”, written by a former teacher and education supervisor Teruo Ebashi, is a standard material of morality lesson in Japanese primary schools. In this story, a magician came across a lonely boy on the street, and promised him to show magic the next day to cheer him up. And soon afterward, a double-booking occurred; the magician received a once-in-a-lifetime offer of making his debut on the stage of a metropolitan theater the next day, which he eventually chose to decline in order to keep his promise with the boy.

Though this story is officially taught to be a good example of sincerity, many theorists have presented different views. This paper joins into the discussion, taking the following position ;

- This story is, as several theorists say, only too unnatural and unreal, so not a few of the students would not really appreciate it and would just pretend to be (or mistake themselves as) impressed or convinced by it.
- Several theorists make a paradoxical saying that the magician would have been all the more sincere to the boy, if he had chosen the metropolitan theater. But such a saying is logically and practically unsupportable.
- If we come to know the magician’s unwritten upbringing (told by the author Ebashi in an interview) in which the magician was deeply influenced by his tender-hearted parents who were always ready to help vulnerable people, his conduct would seem

1) 育英短期大学保育学科

considerably down-to-earth and understandable.

- Ebashi expects the teachers to refrain from referring explicitly to the magician's upbringing, presumably for fear the magician's moral feat should be discounted or degraded. But actually, disclosing such kind of background setting of an exemplary story matters much to an earnest and accurate quest for moral truth.

keywords: moral education, sincerity, the story of “magician”, disclosing the background setting

キーワード: 道徳教育, 誠実さ, 「手品師」, 背景設定の開示

はじめに

小説やドラマにおける登場人物の不可解な言動の背景となる設定が、ほとんど本の最後（とかオンエアの最終回近く）になってから初めて示され、それが比較的つまらないことだったりすると、「なーんだ。だったらあの言動も全然普通じゃないか。もったいつけずに最初から言ってくれよ。」と作者に言いたくなることがある。しかし少なくとも道徳教育の教材として物語を使用する場合には、そのような“あと出し”が実は教育上望ましいやり方である場合がある。このことについて、主として小学校高学年の道徳の時間に「誠実」という徳目を教えるための資料として使用される「手品師」の話（1976年の文部省（当時）『小学校道徳の指導資料とその利用1』に掲載されて以来、道徳授業の定番となってきたストーリー）を例として考える。

第1章 「手品師」のストーリーと、扱われる徳目

まずは「手品師」の資料の全文を次に引用する。教師によってはストーリーの一部をカットして授業をするが、逆にストーリーを勝手に付加することは普通しない。その意味で、以下の引用が、授業を受ける児童が知りうる最大限の情報ということになる。

ある所に、うではいいのですが、あまり売れない手品師がいました。もちろん、くらしはまずしく、その日のパンを買うのも、やっとというありさまでした。

「大きな劇場で、はなやかに手品をやりたいなあ。」

いつも、そう思うのですが、今の彼にとっては、それは、ゆめでしかありません。それでも手品師は、いつかは大げさ場のステージに立てる日の来るのを願って、うでをみがいていました。

ある日のこと、手品師が町を歩いていますと、小さな男の子が、しょんぼりと道にしゃがみこんでいるのに出会いました。

「どうしたんだい。」

手品師は、思わず声をかけました。男の子は、さびしそうな顔で、お父さんが死んだあと、お母さんが、働きに出て、ずっと帰ってこないのだと答えました。

「そうかい。それはかわいそうに。それじゃおじさんが、おもしろいものを見せてあげよう。だから、元気を出すんだよ。」

と言って、手品師は、ぼうしの中から色とりどりの美しい花を取り出したり、さらに、ハンカチの中からハトを飛び立たせたりしました。男の子の顔は、明るさを取りもどし、すっかり元気になりました。

「おじさん、明日も来てくれる？」

男の子は、大きな目をかがやかせて言いました。「ああ、来るともさ。」

手品師が答えました。

「きつとだね。きつと、来てくれるね。」

「きつとさ。きつと来るよ。」

どうせ、ひまな体、明日も来てやろう。手品師はそんな気持ちでした。

その日の夜、少しはなれた町に住む、仲のよい友人から、手品師に電話がかかってきました。

「おい、いい話があるんだ。今夜すぐ、そっちをたつて、ぼくの家に来い。」

「いったい、急に、どうしたと言うんだ。」

「どうしたもこうしたもない。大げき場に出られるチャンスだぞ。」

「えっ、大げき場に？」

「そうとも、二度とないチャンスだ。これをのがしたら、もうチャンスは来ないかもしれないぞ。」

「もう少し、くわしく話してくれないか。」

友人の話によると、今、ひょうばんのマジック・ショウに出演している手品師が急病で倒れ、手術をしなければならなくなったため、その人の代わりをさがしているのだということです。

「そこで、ぼくは、君をすいせんしたというわけさ。」

「あおう、一日のばすわけにはいかないのかい。」

「それはだめだ。手術は今夜なんだ。明日のステージにあなを空けるわけにはいかない。」

「そうか……………」

手品師の頭の中では、大げき場のはなやかなステージに、スポットライトを浴びて立つ自分のすがたと、さっき会った男の子の顔が、かわるがわる、うかんで消え、消えてはうかんでいました。(このチャンスをのがしたら、もう二度と大げき場のステージには立てないかもしれない。しかし、明日は、あの男の子が、ぼくを待っている。)

手品師はまよいに、まよっていました。

「いいね、そっちを今夜にたてば、明日の朝には、こっちに着く。待ってるよ。」

友人は、もう、すっかり決めこんでいるようです。手品師は、受話器を持ちかえると、きっぱりと言いました。

「せっかくだけど、明日はいけない。」

「えっ、どうしてだ。ずっと待ちのぞんでいた大げき場に出られるというのだ。これをきっかけに、君の力がみとめられたら、手品師として、売れっ子になれるんだぞ。」

「ぼくには、明日約束したことがあるんだ。」

「そんなに、大切な約束なのか。」

「そうだ。ぼくにとっては、大切な約束なんだ。せつかくの君の友情に対して、すまないと思うが。」

「君がそんなに言うなら、きつと大切な約束なんだろう。じゃ、残念だが。また、会おう。」

よく日、小さな町のかたすみで、たった一人のお客様を前にして、あまり売れない手品師が、次々とすばらしい手品を演じていました。

この資料を用いて実際に行われている多くの授業では、電話口で《「大げき場」に行くか、「男の子」との約束を守るか》と迷う手品師の気持ちや、手品師が結局は「男の子」との約束を選んだということの是非や、そこで「男の子」に手品を披露している手品師の気持ちについて、子どもに考えさせる。それによって、子どもに「誠実」「明朗」について教えようというわけである。小学校学習指導要領の「第3章 道徳」における、道徳の「内容」の部分では、「誠実」「明朗」について、次のように書かれている。すなわち；

「うそをついたりごまかしたりしないで、素直に伸び伸びと生活する。」

(「第1学年及び第2学年の内容」のうち、「1主として自分自身に関すること」の(4)として)

「過ちは素直に改め、正直に明るい心で元気に生活する。」

(「第3学年及び第4学年の内容」のうち、「1主として自分自身に関すること」の(5)として)

「誠実に、明るい心で楽しく生活する。」

(「第5学年及び第6学年の内容」のうち、「1主として自分自身に関すること」の(4)として)

ということである。「うそをついたりごまかしたりしない」「素直」「正直」というのが、「誠実」ということであり、「素直」「伸び伸び」「明るい心で元

気よく」「明るい心で楽しく」というのが、「明朗」ということだろう。

数ある徳目の中から「誠実」と「明朗」をコンビにする理由は、次のようなことであろう。すなわち、《嘘をつかず誤魔化しをしなければ、明るい心でいられる》とか、逆に《「誠実」でいられず、心に後ろ暗いところがあれば、「明朗」ではいられない》といった意味で、二つの徳目は密接に繋がっている、ということである。ただし第3章でも論じるように、もし、誠実さというものにはその都度しかるべき対象があると考えたら、《ある人（ないし事柄）に対して「誠実」であろうとすればこそ、別の人（ないし事柄）に対して不義理をすることになり、心が全面的に晴れやかというわけにはいけなくなる》といったことも多々考えられるから、二つの徳目はそれほど自明に連動するわけではないということになる。しかし、「誠実さ」と「明朗」さの連動云々の問題は本稿の論題から外れるので、これ以上立ち入らず、《「手品師」の話が、少なくとも「誠実」という徳目を教えるためのストーリーとして使用されている》と押さえたうえで、以下論じていく。

第2章 「手品師」のストーリーの現実離れ

さて、まずこのストーリー自体に対して、不自然さを指摘したり、違和感を表明したりする議論は少なくない。その場合の一番のポイントは、このストーリーの現実離れ、浮世離れだと言ってよいだろう。宇佐美寛⁽¹⁾と松下良平⁽²⁾によるそうした議論を参照しながら、論点を次にまとめる；

- ①「大げき場」よりも「男の子」との約束を選んだこの手品師は、この世の中で稼ぐ、売れる、成功する……、といったことの大変さや尊さを、なめているか、そこから逃げていると言われても仕方がない。また、手品という芸の道を軽んじていると受け取られても仕方

ない。たしかに、手品師の選択は、実社会とは異なる学校という場所で、教え、学んでいる人々が作り出す学校文化にあっては、それほど違和感をもたれずに済むかもしれないが、一般的にはそうはいかないだろう。

- ②手品師と「なかのよい友人」は、友人同士と言いつつ、異様に水くさい。電話口で「まよいに、まよっ」たほど大切に悩ましい案件に対して、友人に事情を打ち明けて相談することもないままに、結論を出してしまった。宇佐美がこの手品師を「閉鎖的な男」と呼んだ⁽³⁾のも肯ける。

- ③この手品師は《「大げき場」をとるか、そうではなく「男の子」との約束をとるか》という二者択一の考え方しかせず、両方うまくやるための“第三の道”を全く模索しなかった。この態度は不自然で非常識である。

もっとも、この③の点に関しては、一方には正反対の見解もある。すなわち、登場人物がそんな都合のよい“第三の道”を模索するのは間違いであり、また、この教材を用いる授業においても、児童や教師はそんな“抜け道”の考案へと逸脱すべきではない、という見解である。例えば、作者である江橋照雄（公立小学校教諭、国立小学校文部教官教諭、市教育委員会指導主事、都立教育研究所指導主事、都教育委員会主任指導主事、公立小学校長などを歴任）も、あるインタビューにおいて言っている；

子どもってというのは、誰かに頼んで手紙を持ってもらって、今日は来れないけどまた時間ができたら来るよとか、約束を破ったから後で大劇場に招待して見せてあげるとか、いろんな方法があったはずだと考えるんです。大人の批評家もそういうこと言うんですよ。そんな、いろんな方法に気がつかない手品師なんておかしいんじゃないかっていうご批判もあるんです。私はね、それは違う、大いに違うと思うんです。

要するに、もちろん手品師もいろいろ考えたん

ですよ、考えたんだけど、どの考えも全て自分にとって都合のいいようにしか、そこをもとにしか考えられない、そういう自分を、すごく腹立たしく思うわけですよ。それで、やっぱり少年との約束どおりにしようと。だから、約束だから後でいいというわけじゃないんです。その日、子どもは楽しみにして待ってるわけだから、後で埋め合わせがつかなくていうことは自分の勝手ですよ。それが許せなかった。

少年にとっては「その日」が大切なんです。十日後、二十日後じゃだめなんです⁽⁴⁾。

同じ線で、さらに強い意見もある。例えば揚野恭子は自らの授業実践記録の中で言う；

実は、どうするべきなのか迷った時点で「両方うまくやることはできないのか」という欲張りな心、「自分の夢も、男の子にもうまくやれる方法はないか」と考えた心こそ「不実な自分」である。本当に男の子のことを考えたのであれば迷う必要はなかったのである⁽⁵⁾。

しかし、この状況で本当に迷いもしない人間とは、もはやこの世のものではないかのようだ。たしかに、迷ってはいけない場合を想像できないこともない。例えば、「男の子」が極度に思い詰めているように見え、ここで少しでも約束を違えて悲しませたら、それが最後の一押しとなって自らの命を絶つだろうと手品師が直感した場合である。しかし、それほど緊急かつ深刻な状況であれば何はともあれ然るべき第三者に連絡しておくべきだから、結局「男の子」を救う決め手が手品師自身の手品である必要性は、却って薄いはずである。そしてもちろん、それほどまでの事態であることは、このストーリーの中には書かれていない。そうした中でもし《「大げき場」に行こうかと迷うこと自体がとんでもない間違いだ》と断定する教師がいれば、その教師は児童に向かって、「私は、君たちや、他の多くの人たちと同じ出発点から道徳を考えてようとはしていないですよ」とでも

言っているようなものだろう。あるいは、「学校では、学校用の別人格を用意しておいて、先生の意に沿った反応を下さい」と言外に教える“隠れたカリキュラム”を作動させているのかもしれない。道徳資料のリアリティの欠如と、リアリティ追求の禁止は、児童が（あるいは誰であれ）それについて本気で考える意欲をそぐだろう。こうしたことで、“道徳版-落ちこぼれ”（あるいは自発的ドロップアウト組、あるいは、自覚のないし無自覚的な“面従腹背組”）が量産されそうである。

ただし、それについてさらに論じる前に、次の第3章で「誠実」という概念について少し整理をしておきたい。と言うのは、上述の宇佐美と松下の議論を私は方向性としては肯定するが、その中で《この手品師は、誠実どころか、実はむしろ不誠実なのだ》という論じ方がなされていて、その論じ方には無理があると思うからである。少なくとも、《手品師は、「男の子」との約束を守ったという、まさにその点において、むしろ、当の「男の子」に対して不誠実だったのだ》と言うのは不自然だと思うのである。この点を少し論じておくことは、議論の整理にもなり、また、《「誠実」という概念にはけっこうな幅があって、道徳授業の担当者が「この授業は、「誠実さ」について学ぶ授業だ」等とそれほど簡単には言えない》ということもわかり、それが本稿の後編における教材論的考察にも生きてくるであろう。

第3章 「誠実」とは、どういうことか

そもそも「誠実」とは、どういうことだろうか。例えば英語に置き換えるとすれば、ある和英辞典によれば、名詞なら「sincerity」「fidelity」、形容詞なら「sincere」「faithful」「honest」「heart-whole」「single-hearted」「single-minded」といったところである⁽⁶⁾。総じて、「約束を守ること」や「表裏のない心」を指している。

一方、前述の松下の議論は、「誠実」というもの

を「思いやり」という言葉で「代表させ」⁽⁷⁾ている。

それぞれ肯ける見解である。そして、こうして見ただけでも、「誠実さ」の概念には幅があることがわかる。例えば、「表裏のない心」と「他者を思いやる心」とは、同じではない。例えば「口と腹の違う、しかし深い思いやり」「思いやりが足りないからこそ、機械的に約束を守る」といったことは、いくらでもありうる。(たしかに、《手品師の「明日また手品を見せる」という約束は、実は文字通りのことを約束したのではなく、「君を救う」という約束だったのだ》と殊更に解釈すれば、理屈上、表裏はなくなるかもしれないが、それはさすがに無理があるだろう。)

こうした幅広さに加えて、さらに、「誠実さ」にはその都度対象があるということも考慮すべきだろう。このストーリーで言えば、手品という芸の道への「誠実さ」、潜在的な観衆への「誠実さ」などが考えられるし、さらに、一口に「男の子」への「誠実さ」と言っても、「男の子」の気持ちに対する「誠実さ」と、「男の子」の“持続可能な幸福”に対する「誠実さ」とは、同じではない。こうしてみたとき、《Aという方面に対して誠実になれば、Bという方面に対しても誠実になる》といった“予定調和”が一般的に存在するとは考えられないだろう。“八方美人”は難しいわけである。(例えば、自分の身体への「誠実さ」などは、他の多くの「誠実さ」と衝突しそうである。)

では、自分の「誠実さ」を、各方面に最適に配分することこそが、「本当の誠実さ」だとみなせばよいだろうか？ 次の例で考えてみる；

問題を抱えた子どもたちを立ち直らせようとしている一人の夜回り先生がいた。関わっている子どものうち4人が、たまたまある同じ晩に、差し迫った悩みに直面していた。4人の相互の関わりは全く無い。先生は最初にA君との相談を始めたが、熱が入り、最善を尽くして8時間かけて話し合った。おかげでA君は前向きになれたのだが、そのあおりで、Bさんとは3時間、C君とは1時

間しか話せないことになり、ついにDさんとは全く話せなくなってしまった。

この場合、《先生は、Bさん・C君・Dさんに対して不誠実だっただけでなく、A君に対しても、却って不誠実だったのだ》と考えるべきかどうか。それは不自然であろう。なぜなら、《短時間で簡潔に話す方が実は効果的だったのに、所詮いい加減だったために、だらだらと8時間も話してしまった》というのならまだしも、普通に、長い方が比較的効果的であったのなら、それを「A君に対して不誠実だった」と言うのは、《相手のために最善を尽くすのより、尽くさない方が、その相手に対して比較的誠実だ》と言っていることになるからである。むしろ、《その先生は、A君に対しては、たしかに可能な限り誠実だったが、ただし自分の置かれた状況全体の中でのバランスを欠いていたので、総合的に見て、その状況におけるその先生として可能な限り最も誠実に振る舞ったとは言えない》とでも言うべきだろう。

つまり、《対-A君という見地から最も誠実な振る舞い方》と《対-Bさんという見地から最も誠実な振る舞い方》とが“予定調和”しないのと同様に、《対-A君という見地から最も誠実な振る舞い方》と《自分のおかれた状況において総合的に最も誠実な振る舞い方》とは“予定調和”しない。逆にもしこの先生が4人に対して何らかの最適な時間配分をしたのなら、《自分が背負ってきたもの、背負っているもの、背負っていくものの総体に対して最も誠実でありたいがために、A君に対しては、可能な最大限度に比べれば少し不誠実になった》という話である。同様に手品師についても、《自分を取り巻く各方面に最適の誠実さを配るべく「大げき場」に行っていれば、その方が「男の子」に対してもよりいっそう誠実だった》とは言えないだろう。

では次の場合はどうか。すなわち、《手品師は一旦は「男の子」を裏切る形で「大げき場」に出演

し、後日必死で探し出し、このたびの背信行為を謝り、その経緯も含めて、人生のいろいろなことを語り合いながら、生涯つきあう」という場合である。これは確かに、単に約束を守って手品を一度ばかり見せるのよりも、ずっと誠実だと思える。しかし考えてみれば、約束を果たした上で、同じように一生つきあってもよいのだから、《「大げき場」を選んだからこそ、「男の子」に対して、却って誠実だったのだ」とは言えない。

ではさらに、次の松下の議論はどうだろうか；

「大劇場」に出ることで得られる収入・知名度やそこで築いた人脈を活用して、こうした問題に目を向けるように人びとや行政に訴えたり、子どもの福祉の改善・改革に自ら乗りだしたりしたほうが、「男の子」にとってははるかに本質的な問題解決法だといえます⁽⁸⁾。

これならたしかに、物事を広く見渡し、先々まで考えているという意味で思慮深く、その意味で「思いやり」も深く、その意味での深い「誠実さ」が感じられる。しかも、「大げき場」を選ぶ必要性があったということになる。しかしここで見込まれている収入、知名度、人脈の獲得は、いわば希望的観測に基づくものであり、不確実な未来に属することである。反対に、明日の約束を守ることは、抜本的な問題解決とはならないだろうが、実行可能性にかけては確実で、即効性がある。一般的に言って、低確率ハイリターン戦略と高確率ローリターン戦略とは、簡単に優劣を言えないはずだ——融資が返済される確実性と、金利との関係などは、まさにそのような話である。(だから、先々までの配慮が実行に移されるまでは、《本当は出世したい人間が用いる気休めの虫のいい言い訳》との見分けが難しいということにもなる。)やはりここでも、「男の子」との約束を優先させた手品師は、「大げき場」に出演する場合よりも不誠実だったと結論することはできない。手品師が約束を守ったことは、愚かなタイプの「誠実さ」だっ

たと評するのも可能だろうが、それもあくまでも「誠実さ」の一種なのであって、「不誠実」の一種なのではない。そもそも、この手品師に対して感じる違和感は、「誠実さの量が足りなかった」とか、「良質の誠実さではなかった」とかいうように、必ずしも「誠実さ」そのものの問題として説明する必要はないのである。「むしろ〇〇する方が、却って誠実ではないか」などというように“誠実競争”を挑む必要はない、ということである。

では、「誠実さ」という徳目にとらわれず、それよりやや広げて、「手品師は十分に真面目だったか?」「道徳的に正しかったか?」「十分に道徳的だったか?」等と問いかければよいだろうか。私は、それでもまだ狭すぎであり、「どうするのが正しいか?」ぐらいでよいと考えている。「正しさ」の種類は特に指定しないで問いかけるのである。全くの守銭奴的行動とか、全くの利己的行動を大部分の児童が追及し出すような誘導にさえならなければ、あとは幅広い発想を促すほうがよいと考えるからである。あるいは、「今は道徳の授業だ」という雰囲気既に強いクラスであれば、「どうするのがよいか?」という問いかけでもよいだろう。

第4章 現実離れを、現実の範囲内に引き戻すものとしての、背景設定

以上見てきたように、「男の子」との約束を優先させた手品師は、少なくとも「男の子」に対しては、不誠実だったわけではない。ただ、その他様々な価値観とのバランスがあまり一般的ではないため、授業を受ける児童から、「綺麗事」として見放され、(自覚的あるいは無自覚的な)面従腹背をくらう危険をはらんだ教材なのだと行ってよいだろう。

しかし実は、ここまで述べてきたことと裏腹のようだが、私は現在、手品師のたった一見このものではないかのような行動を、「誰でもそうすべきだ」と主張するほど肯定してはいないが、

「十分理解できる」とは思っている。それは、作者が件のインタビューにおいて、手品師の生育史に関する次のような「イメージ」を語った部分を目にしたからである；

主人公の手品師が、その少年に対する優しい思いで、優しい行動をとったということは、突然、その場で、少年と出会ったとたんにそういう考えが、あるいは気持ちが湧き立つわけじゃなくて、長い、手品師が育ってきた生い立ちの中で育まれてきた、優しさとか温かさとかそういうものが、資料の一場面の言動に反映してくるものだと私は思うんです。

ですから、この手品師がどういった家庭に育ったのかなと思ったときに、この手品師の父親も大道芸人であったと、しかしあまり売れない貧しい大道芸人だったと、しかも優しいお父さんで、大道で稼いだわずかなお金を、自分が出会った貧しい人、貧しい子どもに、なけなしの金をはたいてでも、あったかい食べ物を食べさせてあげたいなあとか、あったかい着物を着せてあげたいと思って、全部あげちゃうって人なんです。それで帰ってきて、今日はいくら稼いだんだけど、実は途中で寂しそうにしている人がいたから全部あげてきちゃったよと言うと、お母さんが、ああいいことしなすった、私のうちには昨日の残りのスープもあるし、固いけどパンもあるよと、これを屋根の下で食べられる私たちは幸せなんだから、結構ですよ、と言う。夫の気持ち、夫の行動を、こう容認するというか共感する母親であった。しかし、子どもですからね、手品師は子どもだったんだから、不満もありますよ。ある日不満をぶつけたら、同じように私たちより、もっと寂しい、もっと貧しいお腹をすかせている人がいるんだから、私たちは屋根の下で食べられることだけだって幸せなんじゃないかと諭されて、手品師はやっぱ少年だったけど、じいんとくるわけですよ。そういう両親を尊敬している手品師だったと。そういう家庭だから、お金持ちになるとか、儲けるとかできない家庭だから、結局はずうっと貧しいままだけど、心は豊かに、食べ物も着る物も粗末だけど、心は豊かに育ってきたという流れがあって、自分

と同じく、寂しく母親の帰りを待っている少年と出会ったときに、そうしてあげたいという気持ちに手品師はなった⁹⁾。

要するにこの手品師は、幼少時以来、すでに両親からたくさん的人間的な“宝物”をもらった人だ、ということである。心がリッチな彼は、「金持ち喧嘩せず」というのに似て、金銭や名声のような“つまらない”ものをががつと追い求めない、というわけだ。多くの人が生き甲斐にするであろう有能感や達成感なども、彼の場合は“つまらない”ものに含まれるのだろう。こうしておそらく彼は、「大げき場」をきっかけに成功した場合に得られるはずのものが全部逃げていっても実は大丈夫であるような価値観・人生観を持っていて、「男の子」に対する誠実さを貫くことのコスト（：“機会費用”）がそれほどのダメージにならず、得るもの（：“効用”）も実は大きい、という条件下にあるわけだ。

このように見れば、このストーリーは、「誠実さ」よりもむしろ「とらわれのなさ」という“徳目”を我々が堪能するための教材、と言った方が相応しいかもしれない。「誠実」な行為や人柄それ自体を賞賛するためというよりも、むしろ手品師が誠実に振る舞いやすい条件を備えるに至ったという“慶事”を、共に慶ぶための教材ではないか、という言い方もできる。もし何かを賞賛するとすれば、手品師を“道徳の超人”として賞賛するより、むしろ彼を育んだ家庭を賞賛する方が当たっているだろう。

こうした生育史を実際に授業の中で提示してみると、学生の反応は、素直なものだけではない。「親がそんな人なら、逆に子どもは正反対の生き方に向かってもよさそうなものなのに……」といった疑問が出されることもある。子どもが反発もせず、必ず親と同じ生き方を選ぶかのように考えるのは、一面的だというわけである。一理あるし、このような意見を尊重しつつ授業をするべ

きだが、この点については私の場合、(作者のインタビューでも触れられていないことだが)、両親が健在な場合や、他界している場合を、別々に想像することを促している。後者の場合であれば、この手品師にとっては《もはや、父母が生きた通りに生きることこそが、父母と繋がるほとんど唯一の方法なのだ》と想像できる。(一般的に言って、他界した相手と、想像上の“共進化”を遂げること⁽¹⁰⁾は、興味深い文学的テーマでもあり、また全く不可能ではないかもしれないが、しかしなかなか難しいことだろうから。)

このように考えれば、この手品師はよりいっそう、普通の背丈をもった人間に見えてくる。より一般的に言うなら、《崇高なことを実践した(している)人と繋がりたいから、自分も崇高なことを実践しよう》という志向それ自体は、崇高なものとは限らない。それはおそらく涼やかなものではなく、もっと生々しい何かであるだろう。下劣なものとは決めつけられないが、かといって神々しい心映えでもないのである。

また、一度遇っただけの「男の子」との“絆”を非常に重視した手品師の態度は、“縁”を重んじているようにも見える反面、逆に人と人との“絆”というものを軽く見ている、という見方もできて、これも、この手品師が浮世離れして見える一因だろう。しかしこの点についても、《この手品師は、家族(や、さらにその家族をも取り巻くように広がっているであろう、温かい人間関係)と繋がりたいのだ》という解釈からすれば、それほど特異な人物ではないように思えてくる。

以上のように見てくると、この手品師は十分に“この世のものだ”と思えるわけだが、だからと言って私は、手品師の選択が「正しかった」と言っているのではない。その選択が示唆するマイナス面も、いろいろ考えられる。前述のような、価値観のバランスの問題の他に、例えば、《弱者に冷たくしてしまったり、自分自身を支えられなくなる》というようなメンタリティを(一種の弱さ⁽¹¹⁾とし

て)持っている可能性もある。「自分が少しぐらい悪(ワル)であっても、自分自身も大丈夫だし、相手も、この世界も、大丈夫だ」といった安心感・信頼感がないということかもしれない。(実はこの「手品師」のストーリーのテーマは、太田佳光も指摘する⁽¹²⁾ように、むしろ「弱者」であるかもしれない。例えば、もし約束の相手が何らかの強者だったら、そもそも“道徳教材”でありうるだろうか。)あるいはまた、この手品師がその生育史ゆえに、「道端に咲いた花を愛でながら歩く」という(風流な)人生観を身につけているということだとしたら、それは、「男の子」のことを(松下が言うように⁽¹³⁾)児童相談所等に連絡するなどの、しっかりした(社会派の)救済を試みないという行動様式と、表裏一体であるかもしれない。

第5章 手品師の生育史については直接 接触れないという授業方針と、 その狙い

いずれにせよ、件の作者インタビューにあるような手品師の生育史が分かれば、例えば上述のようなさまざまな議論への発展性がある。しかし、冒頭に全文引用したストーリーを読んでも、そうした生育史は分からない。件のインタビューも、教師たちに普及しているわけではない。実際、このストーリーを使用する多くの指導案でも、生育史には言及されていない。ならばさっそくそれを普及させ、児童に積極的に明かしたり、想像させたりすべきかと言えば、作者江橋は、その必要はないと言う；

子どもたちにそういうこと〔手品師の生育史〕を聞く必要はないんです。難しいですから。先生方がそういうイメージをもって授業してくださればと思うんです。そうすれば、子どもたちの迷いや疑問に対しても適切に対応することができると思います。

使ってくださる方、利用してくださる先生方が、そこまでイメージして豊かに深く読み取って、子どもと一緒に話し合ってもらえたら、まさに誠実のみならず、道徳性を豊かにできるのではないかと思います。そういうことを理解してこの作品を使ってもらえたらと思います。⁽¹⁴⁾

このように、手品師の育ちを教師がイメージするだけにとどめる理由は何だろうか。おそらく、「難しいですから」ということだけではないだろうと思う——だいいち、子どもへの話し方を工夫すれば、必ずしも難し過ぎるということはないだろう。より大きな理由はやはり《生育史を明かすと、“道徳的快挙”の価値が下がる》ということではないかと思われる。要するに、「なーんだ。そんな風に育った人なら、まあ、そうするかもね。」というように茶化された形になり、“道徳的英雄”が英雄的である度合いが落ちるということである。江橋は、

……私のイメージは若い手品師なんです。若いからこそ、相手に対しても自分に対しても、誠実に生きた、その誠実な生き方が、アピールするんじゃないか、相手の心を打つんじゃないかと思うんです。まもなく廃業しなければならない手品師じゃなくて、若いけれども、少年の気持ちを大事にしたというところに、この手品師の偉大さ、崇高さがあるんじゃないかと思っています⁽¹⁵⁾。

と言っているが、その「偉大さ、崇高さ」が滅殺されないようにするには、生育史という“種明かし”は避けた方がよいはずである。

そしてそのように、生育史に触れずに授業を行う教師にしてみれば、手品師の「偉大さ、崇高さ」を伝える使命と、教材のリアリティ不足や児童の納得不足との板挟み状態で奮闘することになる。手品師の選択の正しさを児童に伝えるために、さまざまな価値観や、説得のアーギュメントや方法を、無理にでも考え出すことになる。(それによっ

て教師の真剣さが増すとすれば、そのこと自体はけっこうなことだが……。)

また、《“道徳的壮挙”を、その背景等には頓着せずにとにかく見せ、それが子ども——あるいは大人でも——の頭の片隅に残り続け、じわじわと、「自分もゆくゆくは……」という覚悟を迫る》という“方法”の、少なくとも有効性は看過すべきではない。そうした効果の与え手や受け手として、武士にとっての切腹や、軍国少年にとっての(将来の)戦死、軍人・警官等の殉職、津波警報のアナウンスを続けて亡くなった人、……、思い浮かぶことはたくさんあるが、これらのどれを肯定しどれを否定するかは、まずは一つひとつの中身によるだろう。《世知辛い現実の世の中だからこそ、強引にでも、美談の楔を、人びとの心に打ち込まなければ!》という考えも、分からなくはない。たしかに、例えば親が子のために身を削ることなどは、できなさすぎれば問題である。この“方法”で覚悟が形成されるということが、一概に悪いとは思えない。

ただし、そのプロセスで、各人がゆっくりと自分自身や周囲との対話を通して、納得できる部分のみを納得していく、ということは重要だと思う。教材や先例における“道徳的壮挙”を可能ならしめた条件をできるだけ具体的にチェックし、例えば上述のような生育史(という“種明かし”)も見て、「自分と違って、既に多くを授かっている人だからできたのかも……」などというディスカウントを行い、それでもなおディスカウントしきれず、茶化しきれずに残る部分(つまり、否定できない偉大さの部分)だけが、じわじわと覚悟を迫る、ということでもよいと考える。逆に、そうしたチェックを止めることは、後編で述べるような、然るべきデメリットをもつと考える。後編では、道徳授業において教材の背景提示をすることの必要性を、主として「道徳教材の説得力」というアングルから詳述し、さらに、そうした背景提示を(一気に行うのではなく)漸次的に行うことのメリッ

トについて論じる。そして、そのような逐次的提示を行う授業進行の方法を提起し、その方法に見合った教材観について述べる。

注

- (1) 宇佐美寛『「道徳」授業に何が出来るか』明治図書、1989
- (2) 松下良平『道徳教育はホントに道徳的か？ 「生きづらさ」の背景を探る どう考える？ ニッポンの教育問題』日本図書センター、2011
- (3) 宇佐美 ibid. p. 17
- (4) 江橋照雄「誠実さとは、心の教育とは何か」
(光村図書ホームページ「光村チャンネル」
<http://www.mitsumura-tosho.co.jp/>)
- (5) 揚野恭子「明朗誠実な心を育てる道徳教育」(平成16年度広島県道徳教育実践研究指定事業第7回定例報告会 実践報告)
- (6) 『NEW 斎藤和英大辞典』日外アソシエーツ辞書編集部編
- (7) 松下 ibid. p. 40
- (8) 松下 ibid. p. 28
- (9) 江橋 ibid.
- (10) 相手と非常に親密であったために「あいつがもし今ここにいて、これを見たら、こう言うだろう。」ということが手に取るように分かるとするなら、同様に、「今のご時世を生きていれば、あいつならこう変わるだろう。そして次にはこう変わって、生前なら絶対言わなかったような、こんなことも言うだろう。」等ということも、ある程度の確信をもって想像できないとも限らない。
- (11) 松下 ibid. p. 34。カウンセリングの世界で、「カウンセラー自身に弱さがあると、事実上クライアントに依存し、クライアントを無用に拘束してしまうことがある」と言われる話にも近いだろう。
- (12) 太田佳光「道徳教育の今日的意義と重要性」、押谷由夫編著『自ら学ぶ道徳教育』保育出版社、2011、所収、pp.23-28。太田は、「手品師」の資料を「ケア」の倫理という視点から見直そうと論じている。
- (13) 松下 ibid. p. 32
- (14) 江橋 ibid. [] 内は堤補足。
- (15) 江橋 ibid.

〔2012年11月30日 受付〕
〔2013年1月11日 受理〕